

日本橋私記

池田
弥三郎

東京美術

著者略歴

大正3年12月東京生。父は銀座老舗天金主人。叔父池田大伍。泰明小学校・第一市立中学を経て慶応義塾大学卒業。折口信夫に学ぶ。慶応義塾大学教授。現住所東京都世田谷区玉川1-6-10,

検印省略

日本橋私記

八〇〇円

昭和四十七年三月二十五日初版発行

著者 池田 弥三郎

発行者 佐々藤 雄

発行所 東京 美術

東京都千代田区神田司町二ノ七

電話二九二・三三三一(大代)

振替東京一三二八六

一九七二年〇

印刷／東京美術本社工場・製本／美成製本

落丁乱丁はお取替致します

日本音楽著作権協会承認番号第四六六二七〇号

0095-0084-5167

目次

日本橋私記

わたしの追憶

日本橋七ツ立ちの記

大晦日の日本橋

歌の日本橋

日本橋とわたし

日本橋区と京橋区

魚河岸

三越

八丁堀の聞楽亭

橋の名

橋名諸説

わたしの橋名起原説

細き流れの五橋

江戸という処

江戸という地名

江戸の造成

山王社・神田社

「江戸前」という話

江戸っ子

架けた時・架けた場所

創架の二説

町の造成

日本橋を中心に

橋の地理

五街道

道路元標

江戸湊

橋の歴史

江戸の火事

明治の日本橋

明治の架橋

明治の交通機関

一中節「銀鱗」

メーゾン鴻の巣

雨の四季

106

106

111

120

130

130

132

153

157

161

165

179

銀座私記

銀座半世紀

ひと住まぬ町

銀座の泰明小学校

銀座の“ドン”

銀座の道

夜の思い出

三十間堀のお地藏様

八丁目界限

銀座の中の小銀座

銀座の柳

東京一〇〇をねらえ

銀座の文明開化時代

古き「銀座」

銀座火事

煉瓦地

新橋駅開業

新しき銀座

東京雑記

東京・大東京・下町

トウケイかトウキョウか

大正時代と大東京

下町は“城したの町”

東京の道

東京の祭り

ハレの日つづき

江戸の祭り

267

東京の年中行事

270

花見・川開き・二十六夜待ち・酉の市

273

新東京駅名所

276

日本橋・銀座・その他

277

吉原

279

東京は消えた

281

都政について二、三

290

ソロバン道路

290

山の手の水害

292

三十階建て

293

心の生かし方
——都政に思う——

295

東京掌編

300

散歩みち

300

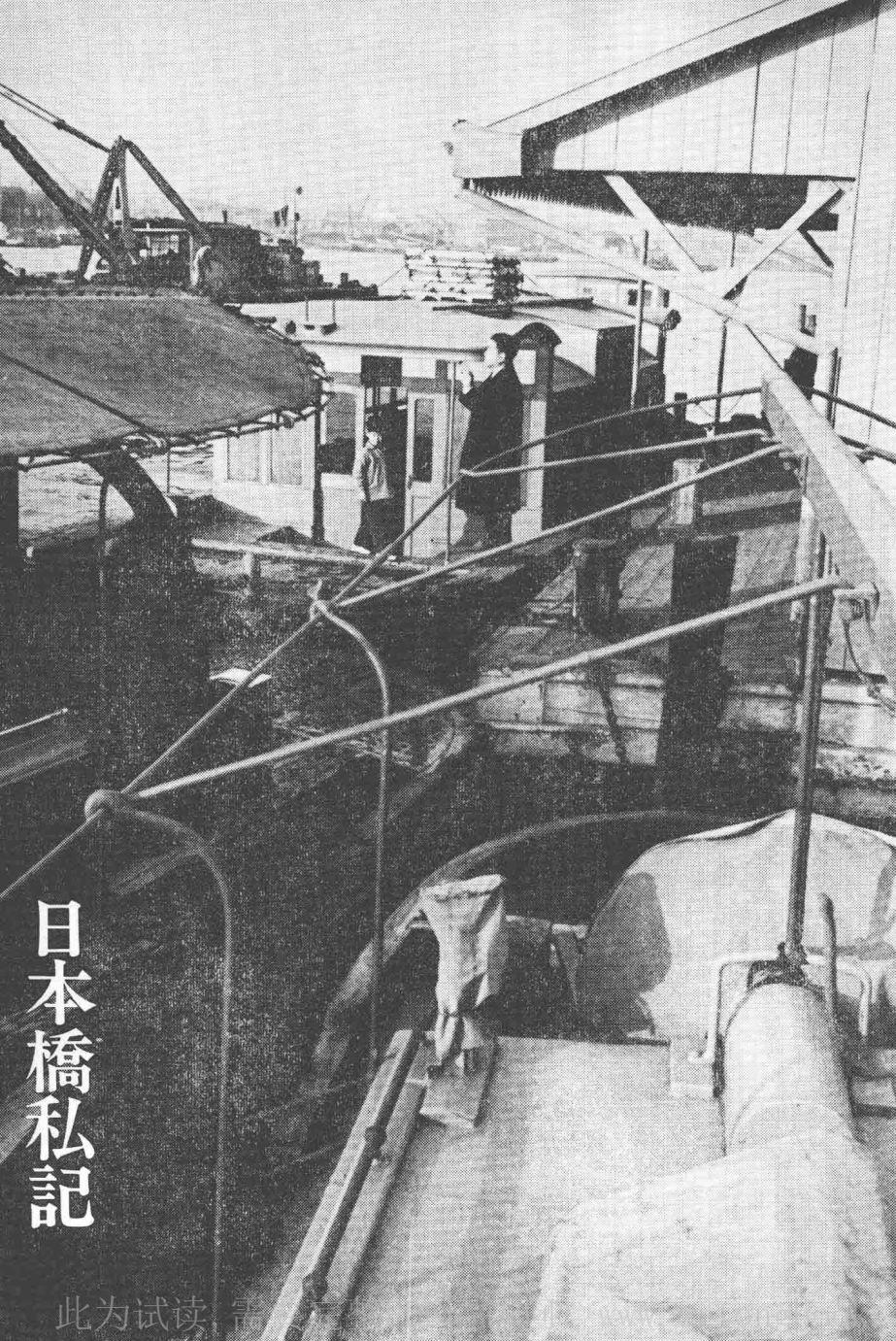
あとがき

浅草

上野

神宮の森

木の町



日本橋私記

此为试读 需

わたしの追憶

同じ東京の下町でも、日本橋区と京橋区とでは、万事に日本橋が京橋に優先した。それは、今、中央区として、表面一つにはなっているものの、やはりどこかに影をおとしている。京橋区内に生れて育ったわたしとしては、残念ではあるけれども、これは素直に認めるより仕方がない。

だいいち、町の名からして、この区内には本だとか、元だとかが付く町名が多く、それはよその区に、同じ名の町名が出来た時に日本橋区内のが、本家本元だというところから、付いたのに違いない。日本橋区と京橋区との町名で、京橋区の方が先らしいのは、日本橋区の数寄屋町に対して、京橋区に元数寄屋町というのがあったぐらいのところだ。それに日本橋区内には、本町だとか、通り町だとかがある。この町名などは、固有名詞ともいえないような名であって、町らしい町がはじめて出来た、その町だから本町であり、通りらしい通りに

面している町だから通り町である。というわけで、そういう地名があること自身、江戸の町がはじまった当初、そこに初めて町らしい町が発祥したのだ、ということをもっとも端的に示していることになるわけだ。

そのうえ、わたしの一家は、親戚のほとんどすべてが京橋区内に集中していて、呼ばれたり呼んだり、遊びに行ったり来たりするのも、まったく京橋区内での行き来だったから、同じ下町の、それも隣りの区であるのに、わたしの過去の記憶の密度は、日本橋区については、ひどく薄いのである。

もっとも、わたしの叔父のところには嫁に来た叔母は、魚河岸の魚問屋の娘だったから、かなり近い親戚が日本橋に一軒あったわけだが、叔母の実家の、わたしにとってのまたいところたちは、同年輩ではあったが、女のきょうだいだったので、わたしが一人で、自由に遊びに行くというようなことにはならず、従って、その親戚があることは、別に、わたしと日本橋との縁を、ひどく深めるということに、働きかけることもなかった。

それに、幼時の経験というものはふしぎなもので、小学生一年の時にあった、ほんの些細なできごとが、わたしにとって、日本橋というところをばかに怖れさせることになった。

小学校の一年生の秋のことだから、まだ大正の地震の前、大正十年のことだ。秋ぐちからわたしは右手のくすり指の先にはいきんがはいって、爪を切りとる仕儀になった。同じ町内のお医者さんにかかっていたのが、あんまりいつまでもなおらないので、誰かがすすめたのだろう。わたしは別のお医者さんのところへ治療にかようことになった。そのお医者さんのうちは、うちからは日本橋区をほとんど通りぬけて、和泉橋のそばにあった。名も忘れてしまったし、どの辺にあったかも覚えていない。ただ、そのお医者さんは、お嬢さんのピアノが自慢で、わたしの治療もそこそこに、娘にピアノをひかして、わたしにつき添って行った、叔母や、店の番頭たちに、解説いりで聞かせるのであった。お医者さんは、わたしなどは聞き手として問題にしてはいなかったが、叔母だって、決していい聞き手ではなかった。三味線音楽にこそ堪能ではあったが、ピアノの演奏などとはおよそ縁の遠い叔母であった。ただわたしはある日の解説で、人間の女が海神のために波の中に巻きこまれていくという物語だけを、鮮明に覚えている。

前後何回かそこへ通ったある日、わたしは番頭のひぎにだかれて、人力車に乗って行った。この日に限らず、人力車にはよく乗って行ったし、行きたびに、叔母か番頭のひぎにだか

れて行ったのだが、この日に限って、江戸橋のたもとの交番で、呼びとめられた。小学校一年生との相乗りは許されていない、というのである。

車屋さんは、気の毒なほどペコペコとあやまった。しかしおまわりさんはなかなか許してくれず、車屋さんも、乗っているわたしたちも、全部名前を書きとめられてしまった。車屋さんは、お天気のいい、ひるまのことなのに、江戸橋のたもとはほろをかけて走り出した。ほろの中からみる、見なれた通りの様子が、違った町へ来たみたいであった。

お医者さんから帰って、わたしは熱をだして寝こんでしまった。幼な心にどうなるのかという心配からであった。もちろん何のこともなかったが、二三日寝たわたしは、それからはどうしても和泉橋のお医者さんへは行かなかった。なおる時機が来ていたのだろう。指もそのままなおってしまったらしい。

しかし、幼な心に与えられたショックは意外に強くて、わたしはその後久しく江戸橋がきらいであり、その橋向うの日本橋一帯も、何となくこわかった。

日本橋七ツ立ちの記

大晦日の日本橋

昭和三十九年（一九六四）の大晦日の日の午後の四時に、わたしは、ひとり、日本橋の上に立ってみた。

……と書きだすと、何か、ものものしい書きだしたが、実は、日本橋、およびその界限のことどもを、書きまとめることをひきうけてから、資料の調査などしていたのだが、結局、三十九年の年末の仕事は、その執筆のために、日本橋界限を歩いて回ることになった。わたしは、そういう仕事を口実に、下町のホテルに寝泊りして毎日、旧日本橋区内を歩いて回った。——ついながら、ホテルを探してみたが、日本橋界限には、気軽に泊れて、気軽に出入りのできる、近代的なホテルがないことに気がついた。わたしは銀座のホテルに泊った。